

[B年] 聖霊降臨節第11主日(2022年8月14日)

【旧約聖書日課】申命記 10章12節～11章1節

10 ¹²イスラエルよ。今、あなたの神、主があなたに求めておられることは何か。ただ、あなたの神、主を畏れてそのすべての道に従って歩み、主を愛し、心を尽くし、魂を尽くしてあなたの神、主に仕え、¹³わたしが今日あなたに命じる主の戒めと掟を守って、あなたが幸いを得ることではないか。¹⁴見よ、天とその天の天も、地と地にあるすべてのものも、あなたの神、主のものである。¹⁵主はあなたの先祖に心引かれて彼らを愛し、子孫であるあなたたちをすべての民の中から選んで、今日のようにしてくださった。¹⁶心の包皮を切り捨てよ。二度とかたくなになつてはならない。¹⁷あなたたちの神、主は神々の中の神、主なる者の中の主、偉大にして勇ましく畏るべき神、人を偏り見ず、賄賂を取ることをせず、¹⁸孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛して食物と衣服を与えられる。¹⁹あなたたちは寄留者を愛しなさい。あなたたちもエジプトの国で寄留者であった。²⁰あなたの神、主を恐れ、主に仕え、主につき従ってその御名によって誓いなさい。²¹この方こそ、あなたの賛美、あなたの神であり、あなたの目撃したこれらの大いなる恐るべきことをあなたのために行われた方である。²²あなたの先祖は七十人でエジプトに下ったが、今や、あなたの神、主はあなたを天の星のように数多くされた。

11 ¹あなたは、あなたの神、主を愛し、その命令、掟、法および戒めを常に守りなさい。

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 12章3～13節

³あなたがたが、氣力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい。⁴あなたがたはまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことはありません。⁵また、子供たちに対するようにあなたがたに話されている次の勧告を忘れていません。

「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。

⁶なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、

鞭打たれるからである。」

⁷あなたがたは、これを鍛錬として忍耐しなさい。神は、あなたがたを子として取り扱っておられます。いったい、父から鍛えられない子があるでしょうか。⁸もしだれもが受ける鍛錬を受けていないとすれば、それこそ、あなたがたは庶子であって、実の子ではありません。⁹更にまた、わたしたちには、鍛えてくれる肉の父があり、その父を尊敬していました。それなら、なおさら、霊の父に服従して生きるのが当然ではないでしょうか。¹⁰肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです。¹¹およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。¹²だから、萎えた手と弱くなったひざをまっすぐにしなさい。¹³また、足の不自由な人が踏み外すことなく、むしろいやされるように、自分の足でまっすぐな道を歩きなさい。

【福音書日課】マルコによる福音書 9章42～50節

⁴²「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。⁴³もし片方の手があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよい。† [44地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。] ⁴⁵もし片方の足があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両足がそろったままで地獄に投げ込まれるよりは、片足になっても命にあずかる方がよい。† [46地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。] ⁴⁷もし片方の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出しなさい。両方の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の国に入る方がよい。⁴⁸地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。⁴⁹人は皆、火で塩味を付けられる。⁵⁰塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

申命記 10章12節～11章1節

10 ¹²イスラエルよ、今、あなたの神、主があなたに求めておられることは何か。あなたの神、主を恐れ、主の道をいつも歩み、主を愛し、あなたの神、主に、心を尽くし、魂を尽くして仕え、¹³私が今日あなたに命じる主の戒めと掟を守って、あなたが幸せになることではないか。¹⁴見よ、天も、天の天も、地とそこにあるすべてのものも、あなたの神、主のものである。¹⁵ただ、主はあなたの先祖にのみ心をかけて愛され、後に続く子孫であるあなたがたを、すべての民の中から今日あるように選ばれた。¹⁶だから、あなたがたの心の包皮に割礼を施し、二度とかたくなになつてはならない。

¹⁷あなたがたの神、主は神の中の神、主の中の主、偉大で勇ましい畏るべき神、偏り見ることも、賄賂を取ることもなく、¹⁸孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛してパンと衣服を与えられる方である。¹⁹だから寄留者を愛しなさい。あなたがたもエジプトの地で寄留者だったからである。²⁰あなたの神、主を恐れ、主に仕えなさい。主に付き従い、その名によって誓いなさい。²¹主こそあなたの誉、あなたの神、あなたが目にしたこれらの大いなる恐るべきことを行われた方である。²²あなたの先祖は七十人でエジプトに下ったが、今や、あなたの神、主はあなたを空の星のように多くされた。

11 ¹あなたは、あなたの神、主を愛し、主に対して守るべきこと、すなわち、その掟、法、戒めを常に守りなさい。

ヘブライ人への手紙 12章3～13節

³あなたがたは、氣力を失い、弱り果ててしまわないように、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを、よく考えなさい。

⁴あなたがたはまだ、罪と闘って、血を流すまで抵抗したことはありません。⁵また、子に対するようにあなたがたに語られている次の勧告を忘れていません。

「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。

主によって懲らしめられても

弱り果ててはならない。

⁶ 主は愛する者を鍛え、

子として受け入れる者を皆

鞭打たれるからである。」

⁷あなたがたは鍛錬として耐え忍びなさい。神は、あなたがたを子として扱っておられるのです。一体、父から鍛えられない子があるでしょうか。⁸誰もが受ける鍛錬を受けていないとすれば、あなたがたは庶子であって、実の子ではありません。⁹さらに、私たちには、鍛えてくれる肉の父がいて、その父を敬っていました。それなら、なおさら、霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。¹⁰肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父は私たちの益のために、ご自分の聖性にあずからせようとして、鍛えてくださるのです。¹¹およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後には、それによって鍛え上げられた人々に、平安な義の實を結ばせるのです。

¹²だから、萎えた手と衰えた膝をまっすぐにしなさい。¹³また、足のために、まっすぐな道を造りなさい。不自由な足が道を踏み外すことなく、むしろ癒されるためです。

マルコによる福音書 9章42～50節

⁴²「また、私を信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、ろばの挽く石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。⁴³もし片方の手があなたをつまずかせるなら、切り捨てなさい。両手がそろったままゲヘナ〔別訳→地獄〕の消えない火の中に落ちるよりは、片手になって命に入るほうがよい。†〔⁴⁴そこでは蛆が尽きることも、火が消えることもない。〕⁴⁵もし片方の足があなたをつまずかせるなら、切り捨てなさい。両足がそろったままゲヘナへ投げ込まれるよりは、片足になって命に入るほうがよい。†〔⁴⁶そこでは蛆が尽きることも、火が消えることもない。〕⁴⁷もし片方の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出しなさい。両目がそろったままゲヘナへ投げ込まれるよりは、一つの目になって神の国に入る方がよい。⁴⁸ゲヘナでは蛆が尽きることも、火が消えることもない。⁴⁹人は皆、火で塩気を付けられねばならない。⁵⁰塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・8月14日「聖霊降臨節第11主日」の日課主題は「主に従う道」。

・旧約聖書日課は、「申命記」から、律法授与の意義が懇々と説かれる中からの箇所。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、イエス・キリストの始められた信仰の道に従う者として受けるべき鍛錬について教える箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、小さな者をつまづかせることに対する警告が語られる箇所。

旧約日課(申命記 10章より)

・「申命記」は、ユダヤ正典「律法」の第五巻で、「出エジプト記」から始まる「モーセ物語」の完結部を構成する。エジプトから民を導き出し、シナイ山での律法授与を経てモアブの荒れ野で40年の世代交代の時代を過ごし、いよいよ約束の地カナンに入る時期が近付いたことを悟ったモーセが、自分自身は約束の地に入ることがないことを自覚して、最後にもう一度、これまでの40年の旅を振り返りながら、神から授与された律法(教え)を再確認する訣別説教の形式で、大部が構成される。29章以下には、モアブ契約、後継ヨシュアの任命、モーセの死などの逸話が置かれている。

・日課箇所を含む5~11章は、モーセがシナイ山で授与された律法について、その授与の意義を示し、その目指すべきところを説き教える内容となっており、繰り返しも少なくない。日課箇所も、6章ほかで述べられていた教えの繰り返しや再確認となっている。

・「申命記」は、アッシリア帝国が衰退していった前7世紀後半の時代に南王国ヨシヤ王がおこなったとされる改革と関連が深いとされる。ヨシヤ王の改革は、「列王記下」22~23章に描かれており、その発端は、修繕工事中の神殿から古い「律法の書」が見つかったことであつたと物語られている。その「律法の書」が、「申命記」(の骨格部分)と考えられている。ヨシヤ王の改革は、前8世紀に北王国を滅ぼして以来、南王国をも事実上支配下属国としてきたアッシリアが退潮し、北王国領域も含めた地域に支配権力の空白が生じたことによって推し進められた。「列王記」の伝える改革は、もっぱら地方聖所(聖なる高台)の廃止と中央聖所・エルサレム神殿への祭儀集中という側面で描かれるが、具体的な記述は北王国領域に偏って語られており、アッシリアの支配から脱した北王国領域の地方聖所と結びついた地方豪族を南王国のもとに集結させる政治的意図に基づいて実施されたと考えられる。その際、王国時代以前から異なる伝承文化圏を形成してきた北領域「イスラエル」と南領域「ユダ」を結び付ける共通のルーツとして「出エジプトとモーセを通して授与された律法」が大義とされ、北領域の地方豪族に自発的な参与を促す呼びかけとして、「申命記」は重要な役割を与えられたと考えられる。

・ヨシヤ王の改革は、王がエジプト軍との戦闘で戦死したため道半ばで挫折したが、その後、アッシリアに代わって台頭してきたバビロニア帝国の支配に降りながら親エジプト派を主流とし続けた南王国の滅亡・バビロン捕囚によって、かえってその思想が温存され、捕囚解放後のエルサレム神殿再建・ユダヤ宗教共同体の構築に際して打ち立てられた思想の骨組みとして位置づけられた。その際には、ヨシヤ王時代に「発見」された「律法の書」そのままではなく、時代の変化に即した再編集がなされたであろう。ヨシヤ王の改革の際にはエルサレム神殿に集約されるユダ・イスラエルの全伝統を旗印にダビデ王家ヨシヤ王のもとに参集することが諸地方豪族に求められたものであったかもしれないが、バビロン捕囚後の時代には、ダビデ王家は飽くまでユダ・イスラエルの全伝統継承を象徴する「盟主」としての名誉的な位置づけとされ、全ユダ・イスラエルの共通のルーツを保証する「律法」とその第一の担い手である「エルサレム神殿」が、全ユダ・イスラエルを終結させるアイデンティティの象徴的役割を負うことになった、と考えることができる。

・日課箇所は、そのような最終形の正典としての「申命記」において、ユダ・イスラエルのアイデンティティたる「律法」の根源的授与者である「主なる神」に対する忠誠が力説されている。16節「心の包皮を切り捨てよ(=心に割礼を施せ)」は、一般に「割礼」の内面化と主体的信仰への促しと解されているが、当時のオリエント世界ではユダ・イスラエルの人々に限らず周辺の西部セム系民族(アブラハムの伝統を共有!)で広く「割礼」が行われていたことを踏まえれば、日課箇所と呼びかけられる「心の割礼」は、「律法授与を伴う契約」のしるしとして「割礼」を再定義・再認識させる意図の表れと考えられる。

使徒書日課(ヘブライ 12章より)

・「ヘブライ人への手紙」は、書簡形式で著された文書であるが冒頭部分を欠いており、差出人(著者)も宛先も不詳で、古代東方系教会では「パウロ書簡」に含めて教えられていたこともあるが、確定されないまま正典新約聖書に収められてきた。宛先については、2世紀のラテン教父テルトゥリアヌスが「ヘブライ人への手紙」と呼んでいるように、早くからユダヤ人キリスト教徒に向けて記された書簡と考えられてきた。というのも、本書簡の内容が、旧約「律法」をキリストにおいて再解釈・再定義して提示するものとなっており、「律法」をはじめとする旧約の知識を前提とした展開となっているからであるが、実際には非常に洗練されたギリシア語で著されていることなどから、少なくともヘブライ語・アラム語圏に想定される典型的なユダヤ人キリスト教徒に向けられたものではないとも考えられている。小アジア~シリア地域に展開していたと考えられるギリシア化したディアスポラ系ユダヤ主義キリスト教徒(ヨハネ教団のような!)が宛先であったかもしれない。

・日課箇所は、11 章で旧約の信仰者が次々と挙げられて、その信仰者の群衆に囲まれるようにして現在の自分たち信仰者が立たされていて、「信仰の創始者としてのイエス」を目標に追いかけて走るように促されていると呼びかけたのに続いて、それゆえの信仰の鍛錬を父である神から受けるべきであるとの勧めが告げられている。キリストの苦難に倣って苦難を引き受ける信仰者にとっての苦難の意味を、鍛錬としてとらえ、個人化した信仰の中に位置づけている。同じ苦難の意味を、「ペトロの手紙」などが、まだ救いに至っていない世界・他者のために必要なこととして宣教論的・共同体的に位置づけているのとは大きく異なる。

福音書日課(マルコ 9 章より)

・日課箇所は、前週福音書日課(9:33~41)に続く箇所、「ペトロの信仰告白」(8:27 以下)から始まる一連の伝承群を構成する終結部として置かれている。場面設定は、前週福音書日課と同じで、カファルナウムの「家」(おそらくペトロの家)での教えの一部。日課箇所は、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えているが、マタイは直前の逸話(38~42 節)を省略して接続し、ルカは直前の逸話をそのまま残しながら、日課箇所はまったく別の文脈の中に置いている。つまり、前週福音書日課と今回の日課箇所との繋がりは、必ずしも明瞭ではなく、事柄を明瞭化しようとするマタイやルカのような判断になることもやむを得ないような構成となっている。このことを踏まえた上で、マルコはなぜ、このような接続(弟子たちの議論~仕える者として生きることの教え~子供を受け入れること~逆らわない者は味方とすべきこと~小さな者の一人をつまずかせてはならない)でこの場面を構成したのかという点が、ひとつの黙想ポイントとなる。

・42 節「小さな者」の原語ギリシア語は「ミクロス」で、34 節「偉い」の原語「メガス(大きい)」と対義となっている(「ミクロス」の別の対義語「マクロス」は「長い」の意で用いられる語)。「偉い(メガス)」と自己認識する弟子たちに対して語られたこの文脈では、「わたしを信じるこれらの小さな者の一人」には、「子供」に代表されるようないわゆる弱者・少数者に限らず、かなり幅広い多くの者が想定されていると考えるべきであろう。そうであればこそ、直前の「逆らわない者は味方」という教えも、この文脈の中で意味を有することになる。キリストに従っている自覚を持つゆえの「偉さ・大きさ(メガス)」を持つ者が、キリストを信じるという立ち位置にしながら周縁に留まっているような者たちに対して、どのような配慮をもって臨むべきかということ、初代教会においても課題になっていたと考えられる。

・繰り返し用いられる「つまずく」の原語は「スカンダリゾー」で、「スキヤンダル」の語源。原意は「罾で捕らえる/陥れる」。「つまずき」は、つまずいた本人の問題ではなく、「つまずき」を誘発させた者の問題として取り上げられている。

来週の誕生日 (8 月 14 日~20 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-204 番「よろこびの日よ」(= I 54)は、19 世紀英国教会司祭クリストファー・ワーズワースが 1862 年出版の讃美歌集に収めた「主の日」の喜びを歌う詞。彼は、詩人ウィリアム・ワーズワースの甥。曲は、ドイツの民謡曲を 19 世紀米国の音楽家メーソンが讃美歌用に編曲。
- ・21-425 番「こすずめも、くじらも」は、1983 年、米国ミズーリ州のコンコーディア・ルーテル教会の設立 110 周年記念のために新しく作られ(作詞作曲は 82 番「今こそここに」と同じコンビ)、後に諸教派の讃美歌集に採用された。
- ・21-501 番「主よ、私たちは祈ります」は、『讃美歌 21』編纂のために公募されて収められた日本人の作詞作曲による新しい讃美歌。作詞は中学英語教師であった深沢秋子で、429 番も作詞。

21-204「よろこびの日よ」

O Day of Rest and Gladness

1. O day of rest and gladness, / O day of joy and light, / O balm for care and sadness, / most beautiful, most bright: / on you the high and lowly, / through ages joined in tune, / sing "Holy, holy, holy," / to the great God triune.
2. On you, at earth's creation, / the light first had its birth; / on you, for our salvation, / Christ rose from depths of earth; / on you, our Lord victorious / the Spirit sent from heav'n; / and thus on you, most glorious, / a three-fold light was giv'n.
3. Today on weary nations / the heav'nly manna falls; / to holy convocations / the silver trumpet calls, / where gospel light is glowing / with pure and radiant beams / and living water flowing / with soul-refreshing streams.
4. New graces ever gaining / from this our day of rest, / we reach the rest remaining / to spirits of the blest. / We sing to you our praises, / O Father, Spirit, Son; / the church its voice upraises / to you, blest Three in One.

21-425「こすずめも、くじらも」

God of the Sparrow

1. God of the sparrow / God of the whale / God of the swirling stars / How does the creature say Awe / How does the creature say Praise
2. God of the earthquake / God of the storm / God of the trumpet blast / How does the creature cry Woe / How does the creature cry Save
3. God of the rainbow / God of the cross / God of the empty grave / How does the creature say Grace / How does the creature say Thanks
4. God of the hungry / God of the sick / God of the prodigal / How does the creature say Care / How does the creature say Life
5. God of the neighbour / God of the foe / God of the pruning hook / How does the creature say Love / How does the creature say Peace
6. God of the ages / God near at hand / God of the loving heart / How do your children say Joy / How do your children say Home